

韓国語音節末鼻音の知覚について

地域言語社会専攻 東アジアコース

前田 真彦

【 要 旨 】

日本語母語話者にとって韓国語音節末鼻音/m,n,ŋ/の知覚は困難であるが、知覚困難な音韻環境の特性を探り、またその知覚の程度と話者の属性との相関を探るため、韓国語を学ぶ日本語母語話者・日本語を習得した韓国語母語話者・日本語未習の韓国語母語話者を対象に知覚実験を行った。

知覚実験 I は、音節末鼻音の環境を単独環境 (am,an,aŋ) と子音後続環境 (amba,ansa,aŋga など 15 種類) とに分け、ソウル出身の韓国語母語話者による録音音声を刺激音とし、129 人を対象に実施した。

知覚実験 I から得られた知見は以下のとおりである。

①「大部分の環境で m が最も知覚しやすく、概ね $m > n > \eta$ の順で正答率が下る」。②「いずれの鼻音も子音が後続する環境より単独環境の方が正答率が高い」。中でも特に③「b が後続する場合には直前の鼻音の正答率が下がる傾向がある」。

日本語母語話者と韓国語母語話者の違いに関しては、④「日本語母語話者は上述の傾向を帯びつつも相対的に m の知覚に強い一方で n - η を混同しやすく、韓国語母語話者は相対的に n の知覚に強い一方で m - η を混同しやすい」。すなわち日本語母語話者と韓国語母語話者では知覚しやすい鼻音のタイプが異なると考えられる。

日本語母語話者の韓国語学習歴に伴う識別力の変化に注目すると、⑤「学

習が進むと識別力は伸長する」。学習段階別には⑥「初級から中級にかけては m, n の識別力の伸長が著しく, ɲ の識別力はあまり伸びない」。それに対し⑦「中級から上級にかけては単独環境・子音後続環境の双方において ɲ の識別力の伸長が認められた」。

韓国語母語話者については, ⑧「韓国での在住期間が長い方が正答率が高いが, 無意味語に現れる音節末鼻音の知覚は, 必ずしもたやすいわけではない」ということが判明した。

以上の知見①～⑧をとおして, 韓国語音節末鼻音の識別能力は学習によって伸長が可能であるが, その難易度は音節末の環境によって異なることが判明した。

知覚実験Ⅱは, 音節末鼻音知覚の手がかりをどこから得ているのかを探るため, 知覚実験Ⅰで用いた am, an, aɲ をもとに切り貼り合成音を作成し, それを刺激音として韓国語母語話者 3 人・日本語母語話者 (通訳レベル) 1 人を対象に実施した。

知覚実験Ⅱから得られた知見は以下のとおりである。

⑨「切り出された 3 種の a はそれぞれソナグラムにみられる音響特性が異なる」。⑩「切り出された a の安定区間のみの音声では後続する鼻音を知覚できない」。同様に⑪「切り出された鼻音部の安定区間のみの音声では, 鼻音は知覚しにくい」ことがわかった。⑫「a と鼻音のそれぞれの安定区間を組み合わせる合成した音声 (例えば [a(m)-ɲ]) では, 先行母音の音響特性によって鼻音が知覚される傾向が強い」という実験結果を得た。また⑬「遷移区間を切り取った [aɲ] は am と知覚されることが多い」ことが判明した。

以上の知見⑨～⑬をとおして, 先行母音にも音節末鼻音知覚の重要な手がかりが含まれていることと, 音節末鼻音の知覚には先行母音からの遷移区間が重要な役割を果たしていることが確認できた。